

**注意！**

■この記事は発行年月日時点の内容のまま公開していますので、ご覧になった時点の法規制(農業使用基準等)等に適合しなくなった内容を含む可能性がありますから、利用にあたってはご注意ください。

# 農作物技術情報 第3号 畑作物

発行日 平成25年 5月30日  
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部  
編集 中央農業改良普及センター 県域普及グループ (電話 0197-68-4436)

携帯電話用 QR コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます  
パソコンからは「<http://i-agri.net>」 携帯電話からは「<http://i-agri.net/agri/i/>」

- ◆ 小麦 小麦の生育は全般に平年よりも5日程度遅れています。県中南部では開花が始まっており、赤かび病の防除時期となっています。既に開花期となっている地域では、直ちに防除を実施しましょう。収穫作業に備え、乾燥施設との連携や収穫機械の整備などを行い、万全の体制で望みましょう。
- ◆ 大豆 排水対策・耕起・碎土などを丁寧に行い、土壌条件を整えましょう。放射性セシウム吸収のリスクを低減するため、カリ肥料の施用やpHの矯正等の対策を実施しましょう。種子消毒・播種・除草剤の散布などは計画的に実施し、初期生育を確保しましょう。

## 小麦

### 1 赤かび病の防除

小麦の生育は平年よりも5日程度遅れていますが、県中南部では既に開花が始まっております。赤かび病の薬剤防除は、品種や天候によって2回目、3回目の散布が必要になりますので、表1を参考に防除を行いましょう。低温が続いた場合、開花が遅れることが予想されますので、防除適期を逃さないよう注意しましょう。

穂が緑色のうちにほ場を見回り、赤かび病にかかっているものを抜き取りましょう。また、赤かび病が多発した場合は、刈り取りを別とし、健全粒に赤かび粒が混入しないようにしましょう。

表1 赤かび病防除の考え方

品種	開花期 (1回目散布)	1回目散布の 7~10日後	2回目散布の 7~10日後
ナンプコムギ	◎ (必須)	○ (曇雨天続く時)	—
ゆきちから ネバリゴシ	◎ (必須)	◎ (必須)	○ (曇雨天続く時)

### 2 乾燥・調製施設との連携

- (1) 小麦の収穫時期は梅雨と重なるため、実際の刈取り期間はかなり短くなります。また、刈取時に雨の日が続き、刈取りが遅れると穂発芽や赤かび粒も発生しやすくなります。適期内に収穫できるよう機械等の点検整備をあらかじめ行いましょう。
- (2) 施設を利用して乾燥・調製を行う場合は、施設側との連携を深め、計画的に収穫作業ができるよう、収穫・受け入れ体制を今から十分に整えておきましょう。

## 大豆

### 1 排水対策の実施

- (1) 排水不良は発芽不良を誘発するだけでなく、根粒の着生を抑制します。
- (2) 播種前に弾丸暗きょやサブソイラ等を用いて排水対策を講じましょう。特に転作田では必ず畦畔

の内側に溝幅 20～30cm、深さ 15～30cm の溝（額縁明きよ）を作り、ほ場水尻の排水口につなぎましょう。

## 2 施肥・耕起・砕土・整地

- (1) 放射性セシウム吸収のリスクを低減するため、カリ肥料の施用（土壌中カリ含量 40mg/100g まで改良）や pH の矯正（pH6.0～6.5 を目標）等の対策を実施しましょう。
- (2) 砕土をできるだけ丁寧に行いましょう。仕上がりが不均一だと、除草剤の効果が低下したり、薬害の誘発、播種精度の低下に伴う発芽不良などの原因となります。
- (3) 砕土はよく乾いたほ場から行いましょう。
- (4) 耕うん・砕土後（特にロータリ耕後）は、土壌が水分を含みやすく、乾きにくくなります。播種スケジュールと天候の動きをみながら、柔軟に作業日程を立てましょう。
- (5) 耕うん後に降雨があると、土壌条件が整わず播種が遅れることがあります。オペレータが確保できれば、砕土作業を追いかけるように、播種、除草剤散布を同日に行うのが理想的です。

## 3 播種作業…栽植密度を確保するため次の点に留意を

### (1) 播種適期

概ね表 2 のとおりです。播種作業は適期内に行いましょう。ただし、ほ場が滞水するような条件や播種前後に大雨が予想されるときは作業を控えましょう。逆に乾燥しすぎた土壌でも発芽の障害となるので、しばらく降雨が見込めない場合には播種深をやや深くしましょう。

表 2 大豆の品種別地帯別播種適期

早晩生	品 種 名	県北部	県中部	県南部
極早生	ユキホマレ	6/ 5～6/25	6/20～7/10	7/ 1～7/20
晩生	ナンブシロメ・スズカリ	5/20～5/31	5/15～6/ 5	6/ 1～6/20
晩生	リュウホウ	—	5/15～6/ 5	6/ 1～6/20
中生	すずほのか（標播）	5/20～5/25	5/15～5/31	6/ 1～6/15
	（晩播）	—	6/ 1～6/5	6/16～6/20
晩生	コスズ	5/20～5/25	5/15～5/31	6/ 1～6/15
中生	南部黒平	5/20～5/31	5/15～5/31	6/ 1～6/20
晩生	青丸くん	5/20～5/31	5/15～6/ 5	6/ 1～6/20
極晩生	岩手みどり、ミヤギシロメ	—	—	5/20～6/ 5

### (2) 播種様式

畦幅（条間）は、その後管理する機械に合わせて設定してください。品種別の栽植密度は表 3 のとおりです。

表 3 普通大豆の品種別栽植密度と播種量

項目	ユキホマレ	ナンブシロメ	リュウホウ	スズカリ	青丸くん
栽植密度(本/10a)	2万～3万	1万～1万2千	7千～1万5千	1万～1万2千	1万～1万2千
畦間×株間(cm) *	70×14～9	70×30～24	70×40～20	70×30～24	70×30～24
	30×30～22				
播種量(kg/10a)	6～9	2.5～3	2.5～5	3～3.5	2.5～3

\*) 畦間を 70cm、1株2本立てとした場合を示した。

「ユキホマレ」の麦後栽培では、畦間 30cm 前後の狭畦密植とする。

「リュウホウ」は、播種期により栽植密度を調整する（晩播ほど密植とする）。

### (3) 播種量

同じ栽植密度でも種子の大きさにより播種量が変わりますので、適正な栽植密度となるよう、種子の大きさに応じて播種量を決めましょう。主な品種の種子の大きさは次の通りです。

＜参考＞平成25年度播種用採種ほ産種子

品種	区分	百粒重 (g/100粒)	必要種子量 (kg/10a)
ナンブシロメ	大粒	29.5	3.6程度
ナンブシロメ	中粒	27.7	3.4程度
ナンブシロメ	小粒	20.4	2.5程度
リュウホウ	大粒	35.0	4.2程度
リュウホウ	中粒	28.4	3.4程度
スズカリ	大粒	30.9	3.7程度
コスズ すずほのか	小粒	10.3	1.3程度
	極小粒	7.7	1.0程度

※ ナンブシロメ・スズカリの適正な栽植密度は、10aあたり10,000～12,000本、リュウホウの適正な栽植密度は10aあたり7,000～15,000本です。

※ 必要種子量は、10aあたり12,000本、出芽率100%の場合で計算していますので、出芽率が80%程度となっても、本数は10,000本近く確保できる種子量です。

(4) 病害虫防除・・・種子消毒を徹底

紫斑病やタネバエ防除のため、チアメトキサム・フルジオキシニル・メタラキシルM水和剤やチウラム水和剤等で種子消毒をします。

「青丸くん」については褐斑粒発生防止のため、ウィルスを媒介するアブラムシを防除してください。アブラムシ類の防除は、土壌施用殺虫剤および本葉第1葉～2葉展開期頃の茎葉散布を行います。種子にチアメトキサム水和剤を塗沫処理した場合は、エチルチオメトン粒剤やジメトエート粒剤などの播種時の土壌施用を省略できます。

(5) 雑草防除・・・丁寧な砕土で除草剤の効果安定化を

ア 土壌処理剤は播種後すぐに散布できるよう作業を組みましょう。また、土壌が乾いている時は、希釈水量も上限量で均一に散布し、処理層の形成に努めましょう。

イ 砕土が不十分な状態で土壌処理剤を使用すると、効果が低下したり薬害の発生するおそれがあります。砕土を丁寧にいき、土壌処理剤と中耕を適切に組み合わせることが大切です。

ウ 覆土が浅すぎる場合も薬害の生じる場合があります。覆土は2～3cm以上確保しましょう。

(6) 中耕培土・・・中耕培土で生育の安定化を

中耕培土には次の効果があり、生育を安定化するのに役立ちます。

ア 雑草防除

イ 倒伏防止

ウ 土壌の通気性を良好にし地温を上昇させ根の機能を向上させる

エ 発根を促進し、根群を発達させる

オ 土壌の排水を良好にする

中耕培土の時期は大豆2～3葉期と5～6葉期が一般的ですが、雑草の発生時期に応じて(除草剤の効果がなくなってきたら)、雑草が小さいうちに行うことが重要です。培土の高さは、コンバイン収穫の場合はあまり高くしないこと(おおむね1葉節以下)に留意します。また、汚損粒の発生を防ぐため、培土の高さは一定となるようにします。

**春の農作業安全月間実施中！** [ 4月15日 ]  
[ ~6月15日 ]  
慣れと油断が事故のもと いつもの作業もまず確認！

次号は6月27日(木)発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。発行時点での最新情報に基づき作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

中央農業改良普及センター・県域普及グループは、現地農業改良普及センターを通じて先進農業者に対する支援活動を展開しています。